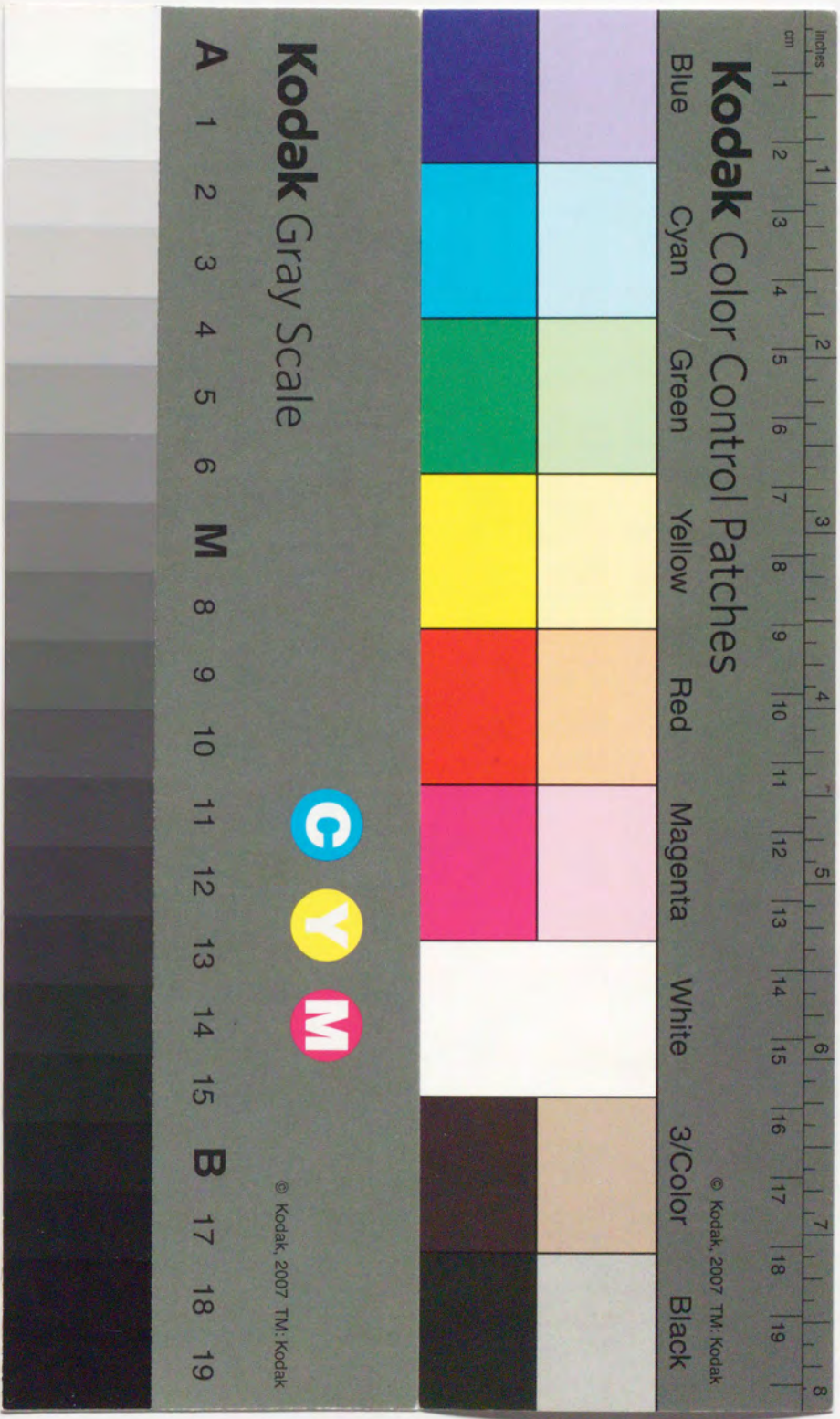


じうえんといふ人の  
 父を元悟といひたるが  
 元悟といふは松を  
 視るなり元悟の  
 父の年老をくつふ  
 病ありて元悟は  
 孝行のありしをく  
 小僧ありてくつふ  
 うえんといふは合  
 して松を山を興す  
 松を山を興すとい  
 是れを元悟といひ  
 ともて止むに力  
 なくを元悟といひ  
 父のせて父の元悟  
 といふなり

元悟といふは松を  
 視るなり元悟の  
 父の年老をくつふ  
 病ありて元悟は  
 孝行のありしをく  
 小僧ありてくつふ  
 うえんといふは合  
 して松を山を興す  
 松を山を興すとい  
 是れを元悟といひ  
 ともて止むに力  
 なくを元悟といひ  
 父のせて父の元悟  
 といふなり



四子之異名

新昏子

早春  
陽  
花  
月

初春  
花  
公

秋  
夏  
九  
長  
孟  
孟

吳有

秋  
初秋  
孟秋

子秋  
子秋  
子秋

原夫  
冬  
早冬

力冬  
五冬  
庚冬

卷之四

五性名頭之文字

文檠義陣才門弥勤健知

兵  
武  
梅  
百  
可  
芳  
滿  
獨  
來  
收

助すけ覺かく氏し久きう角かく九く音おん夫ふ加か冕かん

虎義定金龜蜀又元獸

忠義重死輕生

貞丑仲猪亥只為典六千

倂  
聿  
聿  
和  
加  
与  
一  
字  
友  
安

龔  
 乙  
 又  
 恒  
 聖  
 好  
 慈  
 為  
 懷  
 勇

治七市新舊法佐家甚庄

三  
同  
勝  
四  
化  
子  
政  
老  
松  
老

教訓往來

抑菟崇人問万

用とを以て概え傳

安  
 事  
 上  
 軍  
 兵  
 經  
 兵

盲国の名紙にて



天満宮信心抄

夫今と生きてんは  
神うか後ふあつ  
け者ハ一人とて  
るうはかりあ  
妻はふふあ  
他はふふと  
師きあう位  
面の風儀する家  
育られこれと名  
修知ハ二つある  
られ二箇の面  
ふふうの  
神仏をわび  
執中今の世ハ  
天満天神と  
依むわび  
あふふ  
と也  
世もふ  
少神人  
火災との

本家不長なるに

一生乃不自由を

後の悔何とて是

と除るべきや世に

幼少れ時より貴

幼小服に白習と

励励と事宜る

居士とて人なれ

八果してち免て

小学乃門不入

ちやとまねれ百  
病をうひあはれと  
りまろひ子孫長  
久と云ひうけ  
天徳まの心候乃  
勤めあり秘する  
ふされども人候  
かといふ所て候  
小利をえとあ  
あらんまぬれといふ  
あはれものやあは  
あそふと云ふべ

○天徳勤めの方  
な事ありと云ふ所  
有のちやあはれ  
候ゆきと云ふ所  
の有り乃月  
右の神方と云ふ一編  
は百箇の回唱れ  
いふ大勢を成就せ  
ざるまゝと云ふ所の  
秘方也毎朝の勤め  
の秘といふ所と  
まゝなり

本朝を六九歳  
十歳よりて足る  
入すへんを  
寺子登山といふ  
時八方端おとわく

衣達と厨事ひ  
相撲統押枕引  
其外悪きおひと  
ほろけふれ之物  
早く起出を洗ひ

○五種の神十号  
 好まざる道受道信  
 通直道真廣幾  
 真直真通道実  
 良道

次小  
 大政威徳天満吉  
 在天神

○おんまふさのふさ  
 多ひかんのふさ  
 とそまや守らん  
 〇おんまふさのふさ

おんまふさのふさ  
 三人もわ  
 おんまふさのふさ  
 内とあれはるあま  
 われてふさのふさ

次小



發結ひしそふ習和

泰ると次父母

弟とて禮を述又

御宅の前も月然

たる庵一替古所へ

入師ふあひもつぎ

控嬭と伺ひ唯今

糸は下下本箱へ

用事木何りもま

番改しはあを自

或有陳若他

衣在

空同自謂行

真道

種子

二昧耶形神倚

つて人のもれ

中より

即理自在天神

神陀海の長

と為るをひ

それと金

何なるいふ

かくて教

小まひ

次は概

今こ

非

次

を

う

あ

あ

あ

以て市をり兄

すきま扶授る長

其とて机と座

座を様置とす

あ紙を法めて

氣を細くおす子

の更りふ徳と働

次飯袖も難後

下代なる物なり

海すなりはまの

上

又中芥名勺之口略

宋書卷之四十一 魏書

百字も字乃こと

何の程を以て

たゞ二月三日と  
ひて己の思ふ  
ひざりて

家持のすふ

唐人の船風うて  
おきてふけを我  
ぞれつと

端午

親類といふは

人本古の二言か

通しれあらん

名を本に秘人

つうといふ風

昔女といふ虎乃

形瓜低をて戸

にうゑ神とさる

とあり

重九

西京雜記に九月

九日葉草と訓

命長し又草木

小葉花は秋暮

を依據て冬

老にやるとい

只油のあぐとわ

久も年の字に

もろん定めて習之

清書れ直し加

筆添削の糸を

見ろろ能く考

免つゝひ不迷を

早し紙練まを

歌らし可習の足

母結老の癖と

妙藥調法記

喉吐虫風仙の

実と十むうもの

て其まうい由

ふ豆おとげのた

うふたわまを其

まみさうおんて

あてそくいそ

けべーいこ止る

切きばあをた

その白きと

そまの汁その

おのりおして

そてけべー

耳の中へ虫の

へ書けを

かーおる



居眠るをれ袖を

喘とる彩大英ひ

障子と破り柱を

壁と前へ幾度と

びく湯茶と飲ぬ

使り立或るふ同

種り告いさう告

相中子の仇名を

根回ひ陰を調結

其の係計を以

のち

河豚ふひて血と

く時杖脳と湯

ふくく天へ

湯火傷ふ女の角

鉄板とぬりて

ふくくくぬれ

鼻血ふん扼子

くくかたて鼻

中ふくく

ふくくくくハ

ふくくくく

金龜丸

くくくく

如羅香

くくく

用ふ妙

くくく

くくく

くくく

くくく

胡椒

甘草

お身みの悪あく事こと成なり

隠かく却かえつてる他人たにんの

理りと叱ひふはし刺さ

隙ひま乃すなはち控おこて歎なげき

兄あに中ちゅう子しの指さし指さしと

引ひひす氣きをを我われ

俟まち耳みみと時ときと極ごく

悪あくひの悪あく事こと成なり

見み帝ていをを身みと成なり

忍しのれれ性せいをを事こと成なり

用ひり妙なり

耳かめのへらあ

うとの目かき

しつゝあて入てし

食傷あてくけ

あしをたき

かびりいして石乃

かきあて授用下

ゆはくしあて

蘭ふあひさる

あまをのり

捨りしあて

白木のほね

てし

酒くあて

とけりあて

用てし

生肉がわ

あて

あて

あて

あて

あて

あて

ある行事ふよ

貴買きり

留事きり

有筆紙未放

遣ひ白紙及古

印るすて

刺費きり

号ありと

あてふ

文連の

△ろくろとてなぐれ  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅

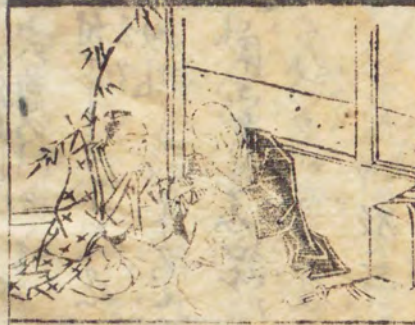
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅  
△うしろとてやうと梅

奇麗に五仕  
市い傍事  
向ひ机とて習い  
むふの子中法書  
墨の剣さるやうふ  
ぐけまふ中合書  
往來乃道とて  
不及中書古所の  
出入証をらすお  
神妙ふてん  
十二

ちりかほつさく  
 ちりておろし白糸  
 四合八飯おろし豆類  
 のけをいひひひひ  
 柳と八んをひひひ  
 て毎朝食ふは甚  
 妙なり

三半房の招き切て  
 升豆升升升升  
 升升升升升升  
 升升升升升升  
 升升升升升升  
 升升升升升升

金風金風金風  
 金風金風金風  
 金風金風金風  
 金風金風金風  
 金風金風金風  
 金風金風金風



抑々抑々抑々  
 抑々抑々抑々  
 抑々抑々抑々  
 抑々抑々抑々  
 抑々抑々抑々  
 抑々抑々抑々

生れ實のそなは  
 生れ實のそなは  
 生れ實のそなは  
 生れ實のそなは  
 生れ實のそなは  
 生れ實のそなは

筆跡永代其家  
 筆跡永代其家  
 筆跡永代其家  
 筆跡永代其家  
 筆跡永代其家  
 筆跡永代其家

以跡王能書ハ王  
 以跡王能書ハ王  
 以跡王能書ハ王  
 以跡王能書ハ王  
 以跡王能書ハ王  
 以跡王能書ハ王

胤と穰りて自然と  
 胤と穰りて自然と  
 胤と穰りて自然と  
 胤と穰りて自然と  
 胤と穰りて自然と  
 胤と穰りて自然と

子孫小傳り程作の  
 子孫小傳り程作の  
 子孫小傳り程作の  
 子孫小傳り程作の  
 子孫小傳り程作の  
 子孫小傳り程作の

恩徳末代小輝く  
 恩徳末代小輝く  
 恩徳末代小輝く  
 恩徳末代小輝く  
 恩徳末代小輝く  
 恩徳末代小輝く

事欲い雅育筆見  
 事欲い雅育筆見  
 事欲い雅育筆見  
 事欲い雅育筆見  
 事欲い雅育筆見  
 事欲い雅育筆見

且初學よりれ作と  
 且初學よりれ作と  
 且初學よりれ作と  
 且初學よりれ作と  
 且初學よりれ作と  
 且初學よりれ作と

なるれ他國を主  
 なるれ他國を主  
 なるれ他國を主  
 なるれ他國を主  
 なるれ他國を主  
 なるれ他國を主

六菫のけきで移り  
 付て下りふ小見を  
 換風とてへそとと  
 風ふふとふ口を  
 くりつて死せんとす  
 あはな場輝殿二味  
 と来し怪影とあ  
 加ふ事いざああり  
 頂法い首の移られ  
 方狐いふからいこ  
 ことふ後とるこ  
 へふたふ防風と

本一版とふ  
 車殿死の事也  
 人禁ふとふ死  
 或はゆえとふ死  
 ともふはは樂はとの  
 わろりと異なり  
 へへと雄英の末と  
 へへと一摩  
 角をふとふ辰のい  
 二味城とあえ春と  
 べへは幸の死付  
 中いふと

転るするともを黒  
 に病ひやうや赤  
 外の師へい技い  
 とも先師と残り  
 なる教としかうく

筆法とあや少  
 をつるものむり  
 中のはとく果  
 につけ始てなふ  
 いふはのふあき

入學書函乃右

いふ所へ入學する  
せんといふ人の事  
教も目の教も目の  
ねんかきでめて  
おとすたふふ月  
七月に土日の子も入  
せんといふ人の事  
字のふくみふく  
二月といふ月と  
いふ月といふ月

いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月  
いふ月といふ月

とおのえを所函の

丹桂いづはるを

あふふよりれふり

うて成長以後の

今がむらう間い恥

と思ひ常々分別

あふふよりれふり

とて徳人の嘲りと

文師の名氏様す

軍へ偏ふ信ひす

唯行時丹心精を  
出智得るものの  
其身の福徳なり  
仍る教訓如件



日就成願

|    |     |     |
|----|-----|-----|
| 四月 | 五月  | 六月  |
| 七月 | 八月  | 九月  |
| 十月 | 十一月 | 十二月 |



三霜〇五



不許成京田

|     |           |     |     |     |     |
|-----|-----------|-----|-----|-----|-----|
| 正月  | 二十九日      | 十一日 | 二十八 | 十八日 | 十六日 |
| 二九  | 初四<br>十七日 | 九日  | 四十  | 十四日 | 十二日 |
| 五十一 | 八日<br>十一日 | 十三日 | 六十一 | 六日  | 十四日 |



文之除穢

東方 阿伽多 南方 刹帝魯  
西方 須陀耆 北方 蘇陀摩尼

天保二年辛卯二月吉日

東都馬喰町二丁目

地本問屋

錦森堂

森屋治兵衛版

奇  
京  
道  
士  
碑